

『イエズス会日本書翰集』と

ポルトガル語文書翰について

五野井 隆 史

はじめに

日本関係海外史料集の編纂・出版は一九七三年から始まり、先ず『オランダ商館長日記』（原文編七冊、訳文編七冊）が、次いで一九七八年には『イギリス商館長リチャード・コックス日記』（一九八二年に七冊をもって完結）が刊行された。さらに、懸案であった第三のシリーズとして、『イエズス会日本書翰集』の書名をもったキリシタン関係史料集の編纂・出版が一九八九年から開始した。同史料集の編纂・出版に至るまでの経過は以下の通りである。

同史料集の編纂・出版について構想し、関係史料の所在調査に着手したのは一九八三年四月であり、その調査結果に基づいた同史料出版のための勉強会が金井圓・加藤榮一両教授との間にもたれたのは、一九八五年三月二二日のことであった。同年五月には、未刊史料所蔵機関に対して出版許可入手のための申請状六通を発送し、二年半を要して許可状を入手することができた。また、すでに刊行されている史料集の編纂者からの利用許可を得る手続もあわせて行なった。同年九月二六日に開かれた研究者集会での議題「五カ年計画」において新規出版物の概要を説明し、一〇月三日の教授会において出版計画が正式に承認された。

一九八六年一〇月二一日及び二四日の両日、ドイツ・ポツムのルー

ル大学講師アルカディオ・シュワード博士の臨席を得て日欧交渉史ゼミナールを開き、『イエズス会日本書翰集』編纂・出版のための企画・実行に関する具体的諸問題について討議した。原文編編纂についての問題点についてはさらに検討事項とし、一九八八年三月イタリアへの出張の折、ドイツ・ハイデヴェーグにシュワード博士をお訪ねし、ケルン大学大学院においてキリシタン史を研究中のマリア・ピント・コスタ嬢を交えて再検討し、貴重な助言を得ることができた。

この小稿では、『イエズス会日本書翰集』の概要、構成、典拠とすべき史料群について言及し、ポルトガル語文の書翰や、ポルトガル人イエズス会員によって執筆された書翰について数量的分析を試み、それらの書翰を通じて日本の初期布教におけるポルトガル人イエズス会員の役割を少しく考える。また、日本人により書かれたポルトガル語文の書翰についても言及する。

一 『イエズス会日本書翰集』の概要

本シリーズは、正確には一五四七年から一五七九年までの三三年間にわたる日本に関する書翰と報告書と各種名簿類とからなる文書を収める。その数はおよそ四五〇点に及ぶ。しかし、本シリーズを構成する大部分の文書は書翰であって、報告書と名簿は極めて少ない。また、本シ

リーズは日本から発信された文書だけからなるのではなく、日本以外の土地で書かれた日本情報や、日本ないし日本在留のイエズス会員等について言及した一節ないし数節からなる文書の抜粋、あるいはローマからの返信などの文書をも含んでいる。

文書の作成者ないし執筆者について見ると、ひとりイエズス会員だけでなく、数は少ないが、イエズス会員以外の修道会修道士やポルトガル船の船長、商人、国王などの世俗のポルトガル人、最初の日本人キリシタンとなった鹿児島出身のアンジロー(またはヤジロー)や日本人領主達が含まれている。従って、上述した文書の内容や執筆者の構成から見る時、厳密には、本シリーズの書名を、『イエズス会日本書翰集』と称することは必ずしも相応しくはないが、広義に解釈して上記書名を用いることとした。

本シリーズが一五四七年から一五七九年までの文書のみを対象としたのは以下の理由による。すなわち、すでに明らかなように、一五七九年に来日したイエズス会東インド巡察師アレッシャンドロ・ヴァリニャーノ *Alexandro Valignano* が断行したいくつかの改革の一つである年報制度の確立によって、ローマ・日本間の通信制度が一新した⁽¹¹⁾。このため、従来行なわれてきた各個人による書翰の自由な発送はできなくなり、一五七九年以降、個人的に書翰を執筆し発送することのできる者は一部の役職者に限定されて、職務的な性格を帯びた書翰が年に二回定期的に送られるようになった。一方、イルマン(修道士)や日本人会員は上長の許可なしには書翰を書き送ることができなくなり、それ以前に多く見られた彼等の書翰は一五七九年以後にはほとんど書かれなくなった。このため、一五七九年を境にして日本から発送された書翰や名簿などの文書の形態、性格及び内容が一変したことが知られる。従って、本シリーズが意図するところは、年報制度が確立する以前に日本から発送された書

翰を主とする日本に関する文書を、可能な限り収録することである。

本シリーズは、一五四七年から一五七九年に至る文書を編年的に整理・配列し、翻刻されたヨーロッパ語の原文テキストと、これらの忠実な日本語訳文のテキストとからなる。ヨーロッパ語の翻刻文については、一五九八年にポルトガル・エヴォラにおいて刊行された『日本書翰集』*‘CARTAS QUE OS PADRES E IRMÃOS DA MESMA COMPANHIA DE JESUS ESCREVERÃO DOS REINOS DE JAPÃO & CHINA AOS DA MESMA COMPANHIA DA INDIA, & EVORA DESDO ANNO DE 1549 ATE O DE 1580, primeiro Tomo.’* を基本テキストとして利用し、その形式や体裁を尊重して入手可能な手書写本によって、エヴォラ版の省略箇所を補い、原文書に近い形に復元しようと努めている。

エヴォラ版『日本書翰集』とアジエタ図書館 *Biblioteca da Ajuda, Lisboa* 及びリスボン市所在の科学学士院図書館 *Biblioteca da Academia das Ciências, Lisboa* 等に現存する手書写本の『日本書翰集』との関係は定かではなく、これらの手書写本の原文がエヴォラ版『日本書翰集』の出版に際して、その底本となったとする証拠はなく、またその痕跡を認めることもむずかしい。このため、この翻刻本ではエヴォラ版と他のいくつかの手書写本との関係や相違について比較検討して、可能な限り、エヴォラ版が底本としたと思われる原文書の内容と形式に近付けようと思つた。

エヴォラ版『日本書翰集』を敢えて基本テキストとして採用した理由は、(一)若干の文書においては年次が相前後しているが、コインブラ *Coimbra* 版及びアルカラ *Alcala* 版の各日本書翰集における文書配列順が遵守されていて、ほぼ年代順に文書(書翰)が配列されており、本シリーズが意図している編年による文書配列の方法に一致している。(二)エヴ

オラ版『日本書翰集』は村上直次郎博士によって一九二六年以降日本語に翻訳され、紹介されて以来、研究者や読書人に最も身近な存在となつて定着している。(三)エヴォオラ版にはコインブラ版やアルカラ版に比べて二倍の一六六通の書翰が収録されていて、一五四八年から一五七九年までの対象年代に合致する。(四)エヴォオラ版『日本書翰集』の原文は一九七二年に日本で復刻されたが、限定本であるために寡少であり入手が困難である、からである。

エヴォオラ版『日本書翰集』に欠如している日本関係文書は、アジエダ図書館とリスボン科学学士院図書館所蔵の手書写本、マドリー市所在王立歴史学士院図書館 Biblioteca de la Real Academia de la Historia、Madrid 所蔵の古写本、ローマ・イエズス会文書館 Archivum Romanum Societatis Iesu 所蔵の日本・シナ部 Collection of Jap. Sim. 文書によって補足される。アジエダ図書館所蔵の古写本から利用することのできる文書は一五六四年までであり、リスボン・科学学士院図書館の古写本は一五六八年までのものである。

種々な理由により入手することができなかった日本関係文書については、イエズス会司祭のゲオルク・シュールハマー Georgius Schurhammer, S. J. 師とヨゼフ・ウィッキ Josephus Wicki, S. J. 師編纂になる『聖フランシスコ・ザビエル書翰集』 EPISTOLAE S. FRANCISCI XAVERII. Romae, 1944-45. 2 vols. 及びウィッキ師編纂の『インド史料集』 DOCUMENTA INDICA. Romae, 1948-90. 18 vols. に翻刻されている文書の全文ないし一部を引用して利用に供している。

エヴォオラ版『日本書翰集』所収の文書に対応する古写本が存在する時は、両者の場合は当然のことであるが、エヴォオラ版において省略されたり削除されている箇所については、古写本に拠って「」の中に挿入して補足されている。また、イルマン・アイレス・ブランダムン Ir. Aires

Brandao が一五五四年二月三日付でゴアから発送した書翰のように、エヴォオラ版所収のそれがアジエダ図書館所蔵の古写本のものに比べて記載内容が少なく省略箇所が多い場合には、古写本をテキストとして採用し、エヴォオラ版に欠けている箇所や若干異なる記載については、註において明示し、あるいは関係ある部分を引用・紹介している。しかし、上記の二つの文書は、ローマ・イエズス会文書館所蔵の自筆書翰 (Goa, 81. ff. 56r-67v. 『インド史料集』第三卷三五号文書) の内容に比べると、大幅に要約されている。従つて、このような場合には上記古写本の書翰と自筆書翰とを共に収録する予定である。

二 エヴォオラ版『日本書翰集』記載の書翰について

出版予定文書およそ四五〇点のうち、エヴォオラ版『日本書翰集』に収載されている書翰の数は一六六通である。これら一六六通の書翰の配列順序は、すでに述べたように、基本的には一五七〇年刊行のコインブラ版『日本書翰集』 CARTAS DO JAPÃO² さらには一五七五年刊行のスペイン語訳のアルカラ版『日本書翰集』 CARTAS DEL JAPÓN の配列方法を遵守している。すなわち、コインブラ版『日本書翰集』所収の八二書翰の配列はアルカラ版『日本書翰集』にそのまま踏襲され、さらにエヴォオラ版にも引継がれている。なお、コインブラ版では文書番号六〇 (ペードレ・ルイス・フロイス Pe Luis Frois のペードレ・コスメ・デ・トルレス Pe Cosme de Torres 宛一五六四年十一月二五日付書翰) は目次のみで、本文が欠けている。エヴォオラ版『日本書翰集』と、コインブラ版『日本書翰集』が拠った原文書翰が同一のものであるか否か確認することはできないが、翻字の仕方は各々異なっており、文章の表現に関しても一部言葉の入れ替えが見られる。

コインブラ版『日本書翰集』所収の八二通が、アルカラ版『日本書翰

Coimbra, Alcala, Evora 各版所収書翰対比表

(Alcala, Evora 両版には文書番号の記載がないため文書の配列順に番号を付した。)

Coimbra 版 (1570)	Alcala 版 (1575)	Evora 版 (1598)	Coimbra 版 (1570)	Alcala 版 (1575)	Evora 版 (1598)
1	1	1	48	44	49
2	2	2	49	45	50
3	3	3	50	46	51
4	4	4	51	47	52
5	5	5	52	48	53
6	6	6	53	49	55
7	7	7	54	50	56
8	8	8	55	51	57
9	9	9	56	52	58
10	10	10	57	53	59
11	11	12	58	54	60
12	12	13	59	55	61
13	13	14	60		62
14	14	15	61	56	63
15	15	16	62	57	64
16	16	17	63	58	65
17	17	18	64	59	66
18	18	19	65	60	67
19		20	66	61	69
20		21	67	62	70
21	19	22	68	63	71
22	20	23	69	64	72
23	21	24	70	65	73
24	22	25	71	66	74
25	23	26	72	67	75
26	24	27	73		77
27		28	74	68	78
28	25	29	75	69	79
29	26	30	76	70	80
30	27	31	77	71	81
31		32	78	72	82
32	28	33	79	73	83
33	29	34	80	74	84
34	30	35	81	75	86
35	31	36	82	76	87
36	32	37			88
37	33	38		77	89
38	34	39		78	104
39	35	40		79	105
40	36	41		80	
41	37	42		81	109
42	38	43		82	
43	39	44		83	101
44	40	45		84	103
45	41	46		85	108
46	42	47		86	111
47	43	48			

集』所収文書八六通に対応する書翰は七六通であり、コインブラ版所収の六通がアルカラ版では削除されている^(三)。アルカラ版所収の残りの一〇書翰のうち八通はほぼ同じ配列でエヴォラ版に見られるが、二書翰はエヴォラ版にはない^(四)。

コインブラ版とエヴォラ版とに収められている書翰の異動について見ると、コインブラ版所収書翰八二通の執筆年代(一五四八〜一五六六年九月)に相当するエヴォラ版所収書翰との比較では、エヴォラではコインブラ版に比べて五通が増補されている^(五)。

エヴォラ版『日本書翰集』所収の書翰一六六通のうち、自筆の原文書や写しが現存せず、エヴォラ版でしか確認することができない書翰は三通である。それ以外の書翰は、アジューダ図書館、リスボン・科学学士院図書館、同じリスボン市所在のトーレ・ド・トンボ国立文書館 *Arquivo Nacional de Torre do Tombo, Lisboa* 及びマドリール・王立歴史学士院図書館所蔵の古写本と、ローマ・イエズス会文書館所蔵の自筆書翰を含む原文書からなる製本文書に見出すことができる。

書翰一六六通の発信地は、日本以外の地からのものは二四通である。ポルトガル国王ドン・セバスティアン *Dom Sebastião* のリスボンとアルメリン *Almerim* 発信の五通は、インド副王及び日本の領主に宛てたものであるが、コーチン *Cochin*、ゴア *Goa*、マラッカ *Malaca*、マカオ *Maicao* 及び広東発信の書翰の大部分はヨーロッパに宛てて発送されたもので、日本人アンジロー・パウロの書翰を除く一八通はイエズス会員のものである。その内訳は、パードレ・フランシスコ・ザビエル *Pe Francisco Xavier* とパードレ・ガスペール・ヴィレラ *Gaspar Vilela* が各四通、パードレ・ベルシオール・ヌーネス・ペレヤ *Pe Belchior Nunes Barreto* が二通、パードレ・コスメ・デ・トルレス *Pe Cosme de Torres*、パードレ・バルタザール・ガゴ *Pe Baltasar Gago*、

パードレ・ルイス・フロイス *Pe Luis Frois*、パードレ・マノエル・テジエイラ *Pe Mamoel Teixeira*、イルマン・ペドロ・デ・アルカセヴァ *Ir. Pedro de Alacavea* 等八名が各一通である。

一方、日本から発送された書翰は一四二通であるが、発信地不明の二通を除いた一四〇通は二二箇所の地域と土地から発送された。鹿児島、天草島、島原半島、長崎を含む大村領内と平戸とを包括する西南九州を発信地とする書翰は五七通である。その詳細を記すと、鹿児島五通、天草島七通(志岐六、本渡一)、大村領内一五通(横瀬浦三、福田四、大村六、長崎二)、有馬領内二一通(口ノ津八、島原二)、有馬二)、平戸一六通、五島二通である。

大友氏が領有した豊後・豊前・筑前からなる東北九州と、大友氏と関係の深かった大内氏の支配地山口とを発信地とする書翰は四〇通である。すなわち、山口三通、筑前博多五通、豊後二〇通、臼杵八通、府内三通、日田一通である。宣教師達が豊後と表記する場合、大友宗麟が一五六二年(永禄五)に臼杵に移り住み、嫡子義統が府内に居住していたこと、またイエズス会の修院が臼杵・府内の両城下にあつたことから、豊後が臼杵府内のいずれを指しているかは俄かに決めることができない。

五畿内、または畿内と通称された地域を発信地とする書翰は四三通である。都(京都)三〇通、堺一〇通、飯盛一通、三箇二通である。

日本から発信された書翰は、地域的には九州と京都・堺を主要地とする五畿内地方とに偏っているが、都市的機能の点から見ると、政治的中心都市と貿易のためポルトガル船が入港した港町、及び政治と商業(貿易)の両機能を備えた都市ということになる。米作を中心とする純然たる農村地域は含まれていない。従って、書翰の発信地を確認することにより、宣教師達の布教活動地域を知ることができる。

日本発信書翰一四二通のうち、イエズス会員の手になる書翰は一三三

通であり、残りの九通は俗人により書かれたものである。そのうちの二通は、ポルトガル船で来日した、商人と思われるポルトガル人二名が書き送ったものである。

イエズス会員により日本から発送された一三三通の書翰のうち、日本国内で同会員宛に送られた書翰が二四通ある。すなわち、

一、布教長に対する報告の形をとる書翰。パードレ・トルレスやイルマン・ジョアン・フェルナンデス Ir. João Fernandez が山口から豊後府内に滞在中のザビエルに宛てた二通、フロイスが島原からロノ津にいたトルレスに宛てた一通、飯盛のヴィレラからロノ津滞在のトルレスに宛てられた一通、フロイスからフランシスコ・カブラル Francisco Cabral 神父に送られた五通(三通は都から長崎宛、二通は臼杵から大友宗麟の日向攻めに随行したカブラルの滞在先宛)、都地方在留のパードレ・ジョアン・フランシスコ・ステファアーノ Pe João Francisco Stefano がロノ津のカブラルに送付した一通である。さらに平戸在留のイルマン・ジャコメ・ゴンサルヴェス Ir. Jacome Goncalvez がトルレスに宛てた二通がある。日本人として最初にイエズス会に入ることを許されたロウレンソン Lourenço が一五六〇年六月二日に都から豊後のパードレとイルマン宛に送った書翰も、この範疇に入る。布教長トルレスは当時府内に常駐していたからである。

二、上長一般に対する報告。イルマンが上長であるパードレに対して送付した書翰がこれに含まれる。イルマン・ルイス・デ・アルメイダ Ir. Luis de Almeida が一五六六年三月一七日付で平戸から島原にいるパードレ・ベルシオール・デ・フィゲイレド Pe Belchior de Figueiredo に送った書翰、同じアルメイダがロノ津から一五七六年一月三十一日付で豊後在留のパードレ達に送った書翰がある。

三、同僚に対する書翰。パードレ同士の間で交わされた書翰であり、都

在留のヴィレラ神父から肥前地方にいたフロイス神父宛の一通(一五六三年四月)、都のフロイスから豊後在留のフィゲイレド神父宛の二通(一五六九年六月一日と一五六九年七月二日付)、都のジョアン・フランシスコ・ステファアーノから豊後在留のフロイス宛の一通(一五七七年七月二日付)、都のグネッキ・ソルド・オルガンティノー Pe Ngnedhi Soldo Organino が臼杵のフロイスに送付した一通(一五七九年)、フロイスが都から豊後在留のパードレやイルマン達に宛てた一通(一五六五年六月一日付)、フィゲイレドがロノ津から豊後の同僚達に送った一通(一五六六年五月二日付)、イルマン・ジョアン・フェルナンデスが横瀬浦から豊後の同僚達に送付した一通(一五六三年四月一七日付)、イマルン・ミゲル・ヴァス Ir. Miguel Vaz が豊後から送付した一通(一五六六年九月一六日付)が含まれる。

五畿内から九州の同僚宛に送られた書翰は二二通を数えるが、その大部分の書翰は、山口からのザビエル宛の二通を除いて、上長を介してゴアやヨーロッパに発送されることを前提として書かれたものである。日本から発送された一三三通の書翰のうち、九七通は二三人のパードレによって、三六通は七人のイルマンによって書かれた。パードレの内訳は、ポルトガル人一二名、スペイン人六名、イタリア人五名であり、イルマンは、ポルトガル人三名、インド出身のポルトガル人二名、スペイン人一名、その他からなる。書翰の数が多く人物について記すと、次のようになる。

パードレ・ルイス・フロイス 三四通

イルマン・ルイス・デ・アルメイダ 一四通

パードレ・ガスパール・ヴィレラ 一〇通

パードレ・ベルシオール・デ・フィゲイレド 八通

イルマン・ミゲル・ヴァス 八通

- パードレ・ジョアン・フランシスコ・ステファアーノ 七通
パードレ・コスメ・デ・トルレス 六通
パードレ・ジョアン・パウティスタ・モンテ Pe João Bautista
Monte 五通
パードレ・グネッキ・ソルド・オルガンティーン 五通
パードレ・フランシスコ・カブラル 五通

なお、本シリーズではエヴォアラ版収載の書翰一六六通のうち、二五通は自筆の原文書翰ないし古写本に比べて著しい省略・削除が見られるため、テキストとして採用しない予定である。エヴォアラ版の二五通に代わる原文書翰や古写本は、ポルトガル語文が一六通、スペイン語文が九通である。ポルトガル語文書翰は以下の通りである。

- Ir. Aires Brandão 一通(一五五四年二月三日)
Ir. Luis de Almeida 一通(一五五九年)
Ir. Jacome Goncalvez 二通(一五六六年三月三日、一五六七年七月三日)
Pe Gaspar Vilela 一通(一五六五年八月二日)
Ir. Aires Sanches 一通(一五六七年一〇月十三日)
Pe João Bautista Monte 三通(一五六四年一〇月一日、一五六七年一〇月二十六日、一五七一年九月二日)
Ir. Miguel Vaz 二通(一五六七年十一月二日、一五六八年)
Pe Luis Frois 四通(一五五六年一月七日、一五六六年九月五日、一五七一年五月二五日、一五七一年九月二八日)
また、スペイン語文書翰は次の如くである。
Pe Belchior Nunes Barreto 一通(一五五四年十二月三日)
Ir. João Fernandez 四通(一五五九年一〇月五日、一五六一年一〇

- 月八日、一五六五年九月二三日、一五六六年九月一五日)
Pe Luis Frois 二通(一五七〇年二月一日、一五七一年五月二五日)
H)

- Pe Alfonso Goncalvez 一通(一五七六年九月二四日)
Pe Belchior de Figueiredo 一通(一五七六年九月二八日)

三 ポルトガル語文の文書について

ポルトガル語で書かれた文書が、本シリーズにおいてどのような割合を占めているのか、数量的分析を試み、その意味するところを若干考えてみたい。

文書数四四九点——先に言及したアイレス・ブランダーンの書翰には長文の原文書翰の他に、その要約からなる書翰があり、これを収載すると四五〇点になる——のうち、ポルトガル語で書かれた文書は三一六点であり、全体の七〇・四%を占める。三一六点の文書の内訳は、書翰一九五通、目録名簿一二点(イエズス会員の名簿 Róis dos Padres e Irmãos 一点、財産目録 Rol de fato 一点)、訓令二通、クノのコンヒオ報告三点、一般報告書四点である。

史料集の『聖フランシスコ・ザビエル書翰集』(EPISTOLAE S. FRANCISCI XAVERII)及び『インド史料集』(DOCUMENTA IN-DICA)に「ついで見ると、『ザビエル書翰集』からは三〇点(書翰二八、訓令二)を引用したが、ポルトガル語で書かれた文書は一九点(書翰一七、訓令二)である。なお、他の言語による書翰の内訳は、スペイン語文七通、イタリア語文一通、ラテン語文三通である。『インド史料集』から引用される一二七文書は、ポルトガル語文六八点、スペイン語文三四点、イタリア語文二五点からなる。一二七点のうち、書翰は一〇五通、他の二二点は目録名簿、報告書等である。また、フランツ・シュッテ師

言語	ポルトガル語	イタリア語	スペイン語	ラテン語
文書数	316	45	83	5
%	70.4	10.0	18.5	1.1

Franz Schütte, S. J. 編纂の『MONUMENTA HISTORICA JAPONIAE』からもポルトガル語文の書翰二通を引用する予定である。

四四九文書のうち、未刊文書は一二七点を数える。アジュダ図書館所蔵文書二七点(ポルトガル語文一九、スペイン語文七、ラテン語文一)、リスボン・科学学士院図書館文書一六点(ポルトガル語文一四、スペイン語文二)、マドリール・王立歴史学士院図書館文書一六点(すべてスペイン語文の写し)、トリレ・ド・トンボ国立文書館文書六点(全点ポルトガル語文の写し)、ローマ・イエズス会文書館文書六二点(ポルトガル語文三一、スペイン語文九、イタリア語文二二)である。未刊文書のうち、全体の五五パーセントに当たる七〇点がポルトガル語で書かれたものである。イエズス会文書館所蔵のうち、イタリア語で書かれた二二点の大部分は、イタリア人パードレ達によって書かれたものである。

本シリーズ収録予定の四四九文書がいかなる土地から発信されたのか、その地域的分布について見ると、ヨーロッパ発信のもの二九点、アジア発信のもの一七八点、アフリカ(モザンビーク)発信一点、日本発信のもの二四〇点である。

ヨーロッパ発信文書のうち、日本に宛てたものは、すでに言及したように、ポルトガル国王の五書翰のみであり、その他にはリスボンやアルメリン発信のゴア副王宛ポルトガル国王書翰、及びローマのイエズス会総会長のゴア在留イエズス会員宛の訓令がある。さらに、ヨーロッパ諸都市間に交わされた文書、例えば、アルメリン・ローマ、バレンシア・

ローマ、リスボン・ローマの各都市間に送信された書翰がある。アジア地域発信の文書については、ゴア、コーチン等のインドから発信されたものはいずれもヨーロッパに送られ、一三五点を数える。また、マカオ、マラッカ、モルッカを含む東南アジア諸地方から発送された書翰と報告書は四三点である。

一方、日本から送られた二四〇通の書翰の内訳については、肥前国長崎を含む下地方からのものがその半数の一二〇通を占める。貿易港平戸から二四通が発信されていることは、領主松浦隆信が熱心な信徒であったにも拘らず、同氏が貿易重視政策を採用したためにキリスト教布教を一時黙認した結果であり、また松浦一族の有力家臣籠手田氏の改宗とその保護によるところが多かったからであり、豊後地方と同様に初期布教が盛んに行なわれたことを物語っている。

一五六三年に改宗した最初のキリシタン領主大村純忠支配地からの発信書翰は、二七通である。すなわち、大村発信八通、横瀬浦発信五通、福田発信五通、長崎発信九通である。一五六三年から一五七九年までの一七七年間に、大村領内から二七通しか発信されなかったこと、しかも一五七〇年以前の発信書翰が極度に少ないことは、大村純忠の同領内における統治力が弱く、同地方での布教活動が十分に行なわれなかったことを示している。

政治的に脆弱であった大村氏に代わって、イエズス会宣教師の保護者の立場にあった有馬氏支配地からの発信書翰は、四一通を数える。有馬氏の城下町有馬の外港として栄えた口ノ津は、有馬領内で初めてキリスト教布教が公認されて短期間に多数の改宗者が出て、キリシタンの町となったために、そしてその結果として上長のトルレス神父が長く逗留していたために、同地からは三三通もの多くの書翰が発送された。その他に、有馬から四通、島原から二通が発送された。

なお、便宜的に下地方に加えた鹿児島からは、ザビエル以来九通が発送されている。この他に、五島発信が五通、天草島発信が一四通（志岐九、天草四、本渡一）である。

禅宗に深く帰依しながらも、ザビエルとの邂逅以来、つねにイエズス会宣教師を保護し、一五七八年に至ってついに洗礼を受けた有力な戦国大名大友義鎮（宗麟）支配下の豊後地方からの発信書翰は、博多からの七通、山口からの四通を含めて五七通である。宗麟が府内を去って移り住んだ臼杵からの発信書翰は一二通、義統の城下町府内からの発信書翰は三通である。上記の両城下町からの発信以外に、「豊後」の発信地名をもつ書翰が二九通あるが、臼杵あるいは府内のいずれの地から發送されたかは、前述したように、書翰の内容を十分に検討しなければ決めることができない。

宣教師達が一般に都と称していた五畿内地方からの発信書翰は六二通である。同地方の布教活動は、ポルトガル人ガスパール・ヴィレラによって日本人ロウレンソ（のちイエズス会に入会）の助けを得て一五五九年に始められ、のち一五六五年にルイス・フロイス、一五七〇年にイタリア人オルガンティノが各々上京してこれを受け継ぎ、一五七六年にはイタリア人ジョアン・フランシスコ・ステファアーノが参加した。

都（京都）発信の書翰は四〇通であり、その半数近くの一八通はフロイスの書翰である。オルガンティノは八通、ステファアーノは七通を各々發送した。堺発信の書翰は一八通であり、そのうちの一四通はフロイスが、他の四通はヴィレラが書き送ったが、それは、京都を追放された宣教師の避難先となったのが堺であったためである。この他に、河内国の三箇からの発信が三通、飯盛発信が一通である。

都地方で活動した宣教師はごく少数であったが、發送された書翰数は意外に多いと言うことができる。それは、京都が政治の中心であって、

この地を舞台にした政争と戦乱とが絶え間なく展開されて危険にさらされ、しかも天皇や公家勢力、及び寺院勢力の迫害に苦しめられたために、活路を見出そうとして幾多の政治工作や打開策が講じられ、またその結果が詳しく書きとめられて報告されたためであった。また同時に、この状況のただ中であって、こと細かに描写し叙述することに特別の天分を賦与されて才能を十二分に發揮することができた人物、すなわち、ルイス・フロイスがこの地方に時宜に叶って配置されていたことを特筆すべきであろう。

四 ポルトガル人イエズス会員の書翰

本シリーズに収録される予定の書翰の執筆者九三名のうち、イエズス会員は八二名、フランシスコ会修道士一名、以上の聖職者以外の俗人が一〇名である。俗人は、次章で言及する日本人四名を除き、すべてポルトガル人である。そのうちの二名は日本にあって書翰を書き認め、他の一名は日本に渡航した経験をもつ船長のジョルジェ・アルヴァレス Jorge Alvarez である。

イエズス会員八二名の中には、二名の日本人修道士ロウレンソとダミアンとが含まれる。八〇名のヨーロッパ人会員のうち、日本に渡航しなかった会員は四三名（バードレ三二、イルマン一一）である。彼等が書翰を發送した土地はローマ、リスボン、マラッカ、マカオの各地に及んでいる。四三名の会員のうち、ポルトガル人は二九名（バードレ一九、イルマン一〇）である。なお、スペイン人は八名、イタリア人は四名、オランダ人一名で、いずれもバードレである。また、イルマン一名の国籍は不明である。

他方、日本に渡航し、あるいは在住したイエズス会員で書翰を發送した者は三七名（バードレ二九、イルマン八）である。その出身国の内訳

はポルトガル人二〇名(バードレ一三、イルマン七)、スペイン人一〇名(バードレ九、イルマン一)、イタリア人バードレ七名で、ポルトガル人が全体の半数以上を占めていたことが知られる。日本の布教地がゴアの管轄下にあり、ポルトガル人を主体とする布教統治が行なわれていた事情から見て、日本においてもまたポルトガル人会員が全体の多数を占めるようになったことは当然のことであるが、ポルトガル人の人数と彼等により書かれた多数の書翰との相関関係を考える時、彼等が日本の初期布教において果たした役割は極めて重要であったと評価することができ。すなわち、日本の開教は、スペイン人のザビエル、トルレス、フェルナンデスの三人により着手され、布教の基礎が築かれたが、その事業を推進・発展させたのは、第二陣以降の日本渡航者であるポルトガル人会員であり、また日本においてイエズス会に入会したポルトガル人達であったからである。

一五四九年から一五七九年までに来日したバードレは全部で三〇名であり、そのうち、ポルトガル人は一五名、スペイン人は八名、イタリア人は六名であった。ポルトガル人会員では、バルタザール・ガゴ、ガスパール・ヴィレラ、ルイス・フロイス、ベルンホル・デ・フィゲイレド等が初期布教に大きな足跡を残した。ガゴは平戸・豊後地方中心に、フィゲイレドは肥前大村領と有馬領及び豊後と博多の教界建設に尽力した。また、京都と堺との開教に尽したヴィレラ、その後継者フロイスの二名によって同地方の教界の基礎が築かれたことは、すでに言及したところである。

一五七〇年に来日した第三代日本布教長のフランシスコ・カブラルは、上長として二度も上京して中央の権力者織田信長を訪れ、その保護を得ることに努めた。また、彼の統治期間の一〇年間に肥前及び摂津・河内の両国において集団改宗が見られ、キリシタンの数は増大を見た。

一五八一年に初代日本準管区長に就任したガスパール・コエリ[≠] Gaspar Coelho の来日は一五七二年のことであった。ポルトガル人バードレのうち、日本から書翰を送付した一三名が来日した年次、発送書翰数、使用言語は左記の通りである。

人 名	来日年	離日年	書翰数	言語
Balthasar Gago	一五五二	一五六〇	二	(p.)
Gaspar Vilela	一五五六	一五七〇	一四	(p.一三、e.一)
Luis Frois	一五六三		六四	(p.五五、e.六、i.三)
Balthasar Costa	一五六四	一五七六	一	(p.)
Belchior de Figueiredo	一五六四		一〇	(p.八、e.二)
João Cabral	一五六四	一五六六	一	(p.)
Francisco Cabral	一五七〇		二二	(p.一四、e.五、i.三)
Balthasar Lopes	一五七〇	一五七五	一	(p.)
Gaspar Coelho	一五七二		二	(p.)
Sebastião Gonçalves	一五七二		一	(p.)
Antonio Lopes	一五七六		一	(p.)
Gongalo Rebello	一五七七		一	(p.)
Laurenço Mexia	一五七九		二	(e.)

(p.はポルトガル語、e.はスペイン語、i.はイタリア語の略)

ポルトガル人会員が書いた書翰一二二通のうち、ポルトガル語文の書翰は一〇〇通であり、全体の八二パーセントを占める。フロイスやカブラルにスペイン語文及びイタリア語文の書翰が見られるのは、ローマの総会長や総会長補佐ないし巡察師のヴァリニャーノに対して職務上両国語による書翰を送ることを礼儀と考えていたためであったろうか。

一方、日本に来たスペイン人やイタリア人のイエズス会員もまた、自国語だけでなくポルトガル語文の書翰を書いているが、これは、ポルトガル語圏内の生活手段として日本ではポルトガル語が会員間で常用さ

れていたことを示すものであろう。また、ゴア、マラッカへの同僚宛書翰が多いことも一つの特徴である。彼等スペイン人やイタリア人の会員は、当然のことであるが、同国人の総会長や、同僚、知人にはイタリア語ないしスペイン語の書翰を送付している。

ザビエルは鹿児島からの発信書翰五通のうち、三通をポルトガル語で書いているが、それらの宛人はマラッカのポルトガル人長官ドン・ペドロ・ダ・シルヴァ Dom Pedro da Silva、ニアの同僚とオランダ人会員のガスパール・バルザエウス Gaspar Barzaeus である。トルレスは三通の発信書翰のうち、一通がポルトガル語文である。ベルシオール・モウラ Belchior Moura の三通はすべてポルトガル語文である。豊後の初期布教に従事したイタリア人のジョアン・パウティスタ・モンテは日本から一通を送付したが、自国語の書翰は七通、他の八通はポルトガル語文である。イタリア語による書翰は三人の総会長宛六通と総会長補佐宛一通である。しかし、ゴアのポルトガル人管区長宛や同僚宛の書翰はポルトガル語文である。五島で活動していたアレシヤンドレ・ヴァラレジォ Alexandre Vallaregio が日本から発信した書翰は、二通ともポルトガル語文であった。

一五七〇年にフランシスコ・カブラルと共に来日したオルガンテイノは、来着後ほどなくして上京し、同地方で一人活動していたフロイスに加勢したが、京都から送った書翰八通のうち五通はポルトガル語文で、他の三通は同国人宛にイタリア語で書かれている。さらに、一五七七年から畿内布教に参加したステファノ神父は同地方から九通の書翰を送付したが、七通がポルトガル語で書かれ、ヴァリニャーノ等のイタリア人上司に宛てられた他の二通は、スペイン語文である。彼が上京前に五島から送付した二通もポルトガル語文であり、イタリア語文の書翰はない。

日本の布教に従事したイルマンは、一五四九年から一五七九年までに二八名に達したが、ジョアン・フェルナンデスを除いた二七名はポルトガル人である。このうち、日本でイエズス会に入った者は、一五五六年から一五七七年までに一五名を数えた。彼等のうち八名が司祭(パードレ)に叙階され、六名はそのための教育及び叙階式に与かるためにマカオに渡り、のち再び来日した。多数のポルトガル人が発心して日本でイエズス会に入り日本人の改宗のために働いたことも、日本布教史上の大きな特徴であった。

商人の前歴をもつルイス・デ・アルメイダは一五五六年に多額の財貨をもって入会したが、一五六五年上長トルレスの名代として畿内地方に赴き、ヴィレラによって基礎を置かれた都のキリシタン教界の状況を詳しく報告した。彼は鹿児島をも含む九州一円を歩いて布教に従事し、一五七九年までに一九通の書翰を送付した。

インド出身のポルトガル人、ミゲル・ヴァスもまた一五六三年に日本でイエズス会に入ったが、それ以降一五七九年までに一三通の書翰を送付した。ポルトガル語文の書翰一通のうち、彼が活動した主要地の天草島志岐からは六通を送付している。これらの書翰を通じて、同地における初期教界形成の様子を知ることができる。なお、イルマンが発送した書翰の数は以下の通りである。

〈人名〉	〈来日年〉	〈日本での入会年〉	〈離日年〉	〈書翰数〉	〈言語〉	
Pedro de Alcaeva	一五五二			一五五三	一 (p.)	
Duarte da Silva	一五五二			一五六四(死去)	一 (p.)	
Luis de Almeida				一五五六	一九 (p. 一八)	
Guilherme Pereira				一五五七	一 (p.)	
Aires Sanches				一五六一	一五七九	三 (p.)
Miguel Vaz				一五六三	一三 (p. 一一)	
Jacome Gonçalvez				一五六四	一五七〇	三 (p.)

五、日本人発送のポルトガル語文書翰

四四九通の文書のなかに、日本人六名によって書かれた書翰九通があり、すべてポルトガル語文である。六名のうち、ロウレンソとダミアンの二名はイエズス会のイルマン（修道士）として活動したが、その書翰はいずれも正式に入会を許される前に書かれたものである。彼等はヴィレラに同行して都に赴き、各々同地から書翰を書き送った。ダミアンの書翰は、ローマ字とポルトガル語とからなる。ポルトガル語文はローマ字日本語を翻訳したものである。このポルトガル語文への翻訳は、ロウレンソのポルトガル語文書翰作成と共に、ヴィレラ神父が行なったと見做して誤りが無いであろう。ロウレンソの書翰は、豊後在留のイエズス会員に宛てヴィレラの指導のもとに京都布教の状況を報告したものであるが、この書翰には同地における布教活動がいかに困難に直面したか、また同地の教界がどのように形成されていったかが詳細に語られている。

イエズス会宣教師と最初に接触し、最初の日本人キリシタンとなったアンジロー（またはヤジロー）は二通の書翰を残している。一通はゴアにおいて、他の一通は鹿児島で書かれた。ポルトガル語をある程度理解し話すことができたとは言え、一五四八年一月二九日付のイグナティウス・デ・ロヨラ宛書翰はかなり長文であり、またその文章・文体が流麗でこなれていることから見て、彼が独力でポルトガル語文の書翰を作成したと見ることはできない。ゴアの聖パウロ学院において彼と接触の深かったイタリア人パードレのニコラオ・ランチロット *Nicolaio Lanci-lotto*、あるいは彼等日本人の霊的指導及び教理教育に参与し、のち彼と共に来日するトルレス神父、あるいはジョアン・フェルナンデス修道士のいずれかが、ポルトガル語文書翰の作成に手を貸したのである。鹿

児島発信の第二信はトルレスかフェルナンデスのいずれかが、その作成に深く関わっていたと思われるが、その文体と書式はトルレスの書翰に見られるところに類似しているように思われる。

他方、他の三名の執筆者は九州の戦国大名であり、彼等によって書かれた五通はいずれもイエズス会の宣教師が彼等の日本語をポルトガル語に翻訳したものである。平戸の領主松浦隆信のインド管区長ベルシオール・ムーネス・バレット宛一五五五年一〇月一六日付書翰は、同地にいたバルタザール・ガゴ神父によってポルトガル語に翻訳された。

豊後の大友宗麟は一五五一年以来しばしばインド総督やポルトガル国王に贈物を送っていたが、一五五三年にガゴ神父に依頼してインド副王宛返信を作成させた。しかし、この返信が実際に送付されたかどうかは明らかにすることができない。彼は一五六七年と一五六八年九月一三日付の二通をマカオ司教ベルシオール・カルネイロ *Belchior Carneiro* に送付したが、これは、恐らく、豊後在任のフィゲイレド神父がポルトガル語文を翻訳したものである。

鹿児島島の領主島津義久は、一五六一年一月一日（永禄四年九月二八日）付と一五六二年（永禄四）付の二通をインド在留のイエズス会管区長とインド副王宛に送付したが、この二通は、豊後から薩摩を訪れたアルメイダ修道士が翻訳したものである。なお、日本人の領主（大名）によって送付されたポルトガル語文の書翰に、日本語文の書翰が添えられていたかどうかは明確でない。

ポルトガル人イエズス会員が俗人の領主のために積極的にポルトガル語文書翰の作成に関与・協力したことが知られるが、それは、彼等が布教推進のために領主から保護を得る必要があったからである。領主達が書翰を送付する意図は、言うまでもなく、ポルトガル商船の誘致と火器を含む軍需品の買付・入手にあったから、宣教師達は彼等からゴアやマ

カオに対する仲介者的役割を果たすことを要求されていたと見ることもできる。

〔註〕

- (一) 拙稿「イエズス会日本年報について」『キリシタン研究』第十八輯、三一八—三二二頁。
- (二) アルカラ版で削除されている六通は以下の通りである。第一九号書翰(バルタザール・ガゴのポルトガル国王ジョアン三世宛、一五五五年九月二〇日付、平戸発信)。第二〇号書翰(ポルトガル国王ドン・セバスティアンの豊後公宛、一五五八年三月一六日付)。第二七号書翰(ルイス・ダルメイダのゴアにある一イルマン宛、一五五九年一月二〇日付)。第三一号書翰(コスメ・デ・トルレスのベルシオール・ヌーネス・パレト宛、一五六〇年一〇月二〇日付、コーチン発信)。第六〇号書翰(目次のみ)。等七三号書翰(コスメ・デ・トルレスのローマ総会長宛、一五六六年一月二四日付、ロノ津発信)。
- (三) エヴォラ版に欠如しているアルカラ版の二通は以下の通りである。第八〇号書翰(ファン・パプティスタの一五六九年一月五日付、日本発信)。第八二号書翰(ガスバール・ヴィレラの一五七一年二月四日付、コーチン発信)。
- (四) エヴォラ版に増補されている五通は以下の通りである。なお文書番号は便宜的に付したものである。第一一号書翰(ザビエルの一五五二年一月二九日付、コーチン発信)。第五四号書翰(ガスバール・ヴィレラの一五六四年七月一五日付、都発信)。第六八号書翰(ルイス・フロイスの一五六五年七月二二日付、都発信)。第七六号書翰(ベルシオール・デ・フィゲイレドの一五六六年五月二五日付、ロノ津発信)。第八五号書翰(ミゲル・ヴァスの一五六六年九月一六日付、日本発信)。

この小稿は、一九九一年一月三〇日から二月三日にかけてケルンで開かれた、ドイツ・ケルン大学ポルトガル・ブラジル研究所主催のシンポジウム

Portugal und Japan im 16. und 17. Jahrhundert: die Nanban-Kultur (十六・七世紀における日本とポルトガル、南蛮文化) のために作成された “A edição das Cartas de Jesuítas no Japão do século XVI—com res- peito às cartas portuguesas na Coleção das mesmas Cartas” の日本語訳文を一部手直ししたものである。